

# 地中海

MARE MEDITERRANEUM

2024. 1



令和6年1月1日発行(毎月1回1日発行)第72巻第1号

No.788

## 創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の嚮愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明助で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

# 地中海

二〇二四年 一月号 (通巻七八八号)

■創刊70周年記念地中海全国大会(浜松大会)

記録・泉 嘉穂子

46

■鑑賞・三好直太の歌 6 (冬)

久我田鶴子 15

◇シルクロード・カフェ —— 【責任編集】 木村文字 50

■遊覧寄港(読書が広げてくれたもの) 菅野順子 62

送風塔 さとうちえこ 61

■歌壇月旦 —— 玉井綾子 63

ブックレビュー賞

■十一月号作品批評 70

A.....牧 雄彦・西堤啓子

安部 律・松本多摩子

B.....神戸良二・富岡明子

C.....高橋啓子

オリーブ集.....もとむらしげと

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より [編集部] 92

クリップ.....91 神田通信.....表3

◇今月の二十首詠.....敗北の夏 石澤利夫 2

■作品 ① 奥田陽子・小野雅子他 4

A 若林美知恵他 20

B 渡辺英子他 52

C 遠藤美智子他 64

A 定金崇恵他 78

■オリーブ集 石田明彦・石塚貴美恵他 40

◇今月の二人 志村順子・ありまめぐみ 16

私と短歌との出会い(257) 永田進一 19

■(第一歌集を眺む) 10 白子れい歌集「疏水のほとり」 仲西正子 32

―何をどう詠うか―テーマをもって―

●追悼・虎谷信子 福光敬子・選 36

虎谷信子作品三十首 牧 雄彦・松井みね・福光敬子

## 敗北の夏

石澤 利夫

振り向けば思ひ出達が騒ぎくる彼の人此の人語りは尽きぬ  
 健康は美味しく食へることなのと昭和を語る尽きぬ思ひを  
 グランドに男爵植ゑて敗戦を余儀なくされて児らが掘りをり  
 あやまてる教へをしたとわが恩師訪ね来たりて母に詫びをり  
 教科書に墨を塗りしと友の短歌戦時の誤りよくぞ詠みたり  
 一瞬に人の命を奪ひたる原爆の無念を思ふ八月  
 十四歳母を泣かした故郷の駅に佇み雨を音きく  
 短冊に世界の平和と書いて詠みひそかに思ふ戦の国を

一九二九年生まれ。  
 「萬春の会」所屬。

戦はぬ憲法ありてこそ平和なり七十八年顧みるべし

食祭の駅前通りのアーケード礼文・利尻の幟はためく

生きて来て良かったと思ふ彼の戦を青春として悔いあらざれば

闘つて勝ち得しもの一つなり男女同権誇示して然り

石狩野走る夜汽車にふと思ふ敗北の夏デッキに眠りしを

ケロイドのほほに茂りし友と組む労変闘争斯くも終へたり

ひそやかに敵意あらはに鹿の群れ峠の道をしばしば塞ぐ

日車の高きに並び咲くものか朝顔負けじと絡みつきをり

歌友の励ます声にゆるぎなく今朝も朗らに電話してくれぬ

灰色の海に向かうに北朝鮮国難にして七十八年なる

妻逝きて三十年なる祥月の十二月八日は大戦の日なり

お前にはラブレターなどは書かずともいつも忘れぬ感謝の心

# 作品

## A

奥田陽子

微笑み

・羊

おどかなる笑み給いたり若くして稚くありしわが上にさえ  
風格というを思えるたはずまいただ側にいて楽しかりにき  
師を慕い師の足跡に従きゆくと長く詩型を守りきたりぬ  
いさぎよし生涯にただ一冊をのこし逝きたり歌集『葛家のうた』  
妹の力 年中行事へ追ひ書きにありて今にし先生を想う  
時おりの歌の評にも笑みこぼれなお若かりき電話の声の  
幾十年見守り給いし月日果て虎谷信子さん発ちてはるかなり

小野雅子

シングル・ルーム

・羊

紺色の旗にはじまる大会の吊りよるこび浜松の街  
四年ぶりの全国大会なれど昨日までも会つてたやうな人々の笑み  
海近くはるかに見ゆる発電の白き風車の二基がかがやく  
短歌ありてひとの想ひと生活を肉声できく班別歌会  
五、六人で畳の部屋に寝しこともいまはなつかしシングル・ルーム  
旅の朝町ながむれば散策かじぐざくに道あゆむ人見ゆ  
雪はまだ山頂のみで黒々と裾ながく引く車窓の富士は

磯田ひさ子

ミスターリンカーン

・森

バラの花の見ごろと娘にいざなはれ秋のひと目をこころ養ふ  
花びらの縁そり返りくれなるの蛍光色に「マリア・カラス」は  
濃き紅の花冠横たはるごとく咲く「クレオパトラ」の銘に頷く  
枝分かれしたる「インカ」のそれぞれがビタミンカラーのこぶしを掲ぐ  
しろたへの花弁ふちどるくれなるの八重に膨らみ「初恋」重し  
赤すこし滲む黒バラ屹立す刺ふとふと「ミスターリンカーン」  
ハーブティ飲みつつ憩ふ夫あらば父あらばとは互みに言はず

梅本武義

残念無念

・羊

虫の声無く空調の音を聞く目覚めに一瞬とまどう入院  
手をつなぐ総理を見つつふと気付く妻と並んで歩くが無きに  
金婚に白寿の義母を見て思う寿命は我が先立つことを  
家にては又かの入れ歯会食に忘れて来たり残念無念  
ドア開かず部屋番号を見て気付く方向音痴またもホテルで  
按摩機に揉まれつつ居て思い出すロシアの強弁あの馬顔を  
戦鬨の停止でもよきを停戦を主張しガザの被害が拡大

## 大 浪 美 雪

放生会

・森

池の辺の式台の上に櫛置かれ放生の機<sup>はかり</sup>の準備整ふ  
舞殿にお囃子の人ら膝揃へ放生会始まる合図待ちをり  
たまきはる命放たる岩に止まり鳩はいつもの如く啄む  
越天楽流るる中を鯉の稚魚赤きがそつと池に放たる  
放たれるを待てずに跳ねる稚魚のあり勢ひのまま池をめぐれよ  
放生会の神事の間にも救急のサイレン響き世はかまびすし  
秋祭りに先立つ神事放生会千三百年の時を引き継ぐ

## 上 林 節 江

やつと秋

・滝

背きまま長くつづきし山肌<sup>やまはだ</sup>に黄葉の照りてういういしさま  
長くながく猛りし炎暑に衰えてわが体力の低迷つづく  
目を覚ませ復活をせよガツンとぞ揺さぶりきたり紅葉づる光  
朝のひかり段段畑に及びきてりんごは赤き輪郭を増す  
豊穡の黄金の光ふるさとに「ささにしき」とう名品みのる  
旨き米ありて美酒あり「秋の鶴」とおき御代から愛されながら  
ふくふくと山のあけびの育ちゆけ熊も猿もわれも待ちいる

## 神 田 鈴 子

全国大会

・大

四年ぶりに開催されし全国大会 創刊七十周年はおろそかならず  
久びざの大会に集ふ人々の笑顔があふる浜松の地に  
それぞれに旧交あたたむその中に姿の見えぬ人をさびしむ  
晴天に恵まれ過ごす大会の楽しき時はいと短し  
またの日の会ひを約して別れ来ぬすやかならむ命信じて  
昇り来し展望塔より凝らす目に白くかすむは通かなる富士  
コスモスや女郎花咲く浜名湖の岸辺をゆけり秋のただなか

## 菊 地 栄 子

命知らず

・海

いずこにもほのかに白き栗の花病氣あがりの妹<sup>いもうと</sup>に付き添う  
パスさえも止まりて横断促し来この世の感謝限りなきなり  
赤トンボ捕らえんばかりにまつわれる命知らずは生れたてらし  
草生えぬわれの陣地に胸がすく町内朝の草引きしち  
焦点が定まり気付く背草のしげみに若き猫のぞきいる  
財布をば携え待つに尾花沢スイカ・桃売り声遠ざかる  
青柿は蒂をゆるませ落下する神の力は神のみぞ知る

## 北 山 雪 男

雲のへなちよこ

・伊

NHK短歌の朝<sup>あした</sup>「この選者しあはせなのね」と妻が呟く  
楓芽衣子、女囚さそりの怨み節 いま欧州の街に流ると  
またひとつ過去の光が旅を終へ 谷村新司、さらば昂よ  
パブル期以降ネアカの唄が耳につき不満分子は暗みつつ聞く  
沈黙の苦手な口が呼び寄する人世の奈落 昨日また今日  
裏日本と蔑されし地に生を享け湿り骨身に凍み込みてをり  
武勇伝何一つ無き来し方と仰ぐ夕空 雲のへなちよこ

## 草 刈 十 郎

大花火

・世

かたつのみ見守る一番勝負あり団扇一斉に動き出すなり  
開空に炸裂したる大花火体当たりする迫力のあり  
終日を鳴きしきる蝉その中に今日を限りの命あるかも  
敗戦忌昭和の写真さがせども笑顔の人の一人とてなし  
庭中を飛びまはりるし秋蝶の消えしと思はせまた顯はるる  
八月を迎へて思ふこの月は手を合はすことばかりなる  
露の玉ひとまたたきをしたごとくきらり光りて落ちてゆくなり